

特集：ミュンヘン・ハイエンドショー 2017

High End 2017 in Munich

=名実共に今や世界最高・最大のオーディオショーで未来を占う=
~第36回を迎えたハイエンドでの温故知新~

森 芳久 編集委員

今年もハイエンドオーディオファンが期待する『音の祭典』High End 2017が5月18日から21日の4日間ミュンヘンのM.O.Cで開催された。第36回を数えるこのハイエンドショー、今や名実ともに世界一の規模とクオリティを備え、世界のオーディオファンに新しい情報を発信し続けている（写真1、写真2）。



（写真1）ハイエンドショーのアイコンバルーン（写真2）入場者を歓迎するアルプホルン演奏

多くのオーディオ関連のショーやイベントが衰退、または方向転換を迫られている中であって、常にハイエンドオーディオに焦点を当て続けてきたドイツハイエンド協会のブレの無い姿勢、またそれを支持してきたオーディオ業界の地道な努力の成果が実際の数字に、そしてここに集まる人々の熱気となって表れているのであろう。目先の集客数や収入源に注視し過ぎるあまりいたずらにショーの名前を変え、またユーザー不在のショーの運営姿勢に走りがちなどこかの国のオーディオ関係者には、是非ともこのショーが成功し続けている事実を冷静に分析・研究して欲しいと切に願うものである。

また、毎年ショー閉会后すぐに発表される来場者数や報道関係者数などのファクトシートがこのショーの成果を考える大きな指標となっている。そのためこの数は第三者である独立専門機関が厳しく管理した実数字であり、まさにドイツらしい几帳面なやり方である。事実、いたるところで入場バッジ（登録名札）のチェックが行われ、来場者は初回入場の時にバーコードの付いたリストバンドを嵌められ、不正入場などができないよう厳しくチェックされている。また、ここに示された来場者数には出展者、業界関係者、報道関係者、一般ユーザーと分けられ、それぞれの数が正確にカウントされているのだ。それだけにこの数字を分析することでいろいろな側面が見え、ハイエンド業界の将来を占うにも大変役に立つものである。筆者は、来場者数のみを気にした仲間内だけのいわゆる公称数字なるものがいかに無意味であり、それが業界をミスリードしてしまう危険についてことあるごとに警鐘を鳴らしてきたが、ここでも日本オーディオ協会とし

でも早く正すべきであると記しておきたい。

今年発表された各数字と前年比を次の(表-1)に記した。この表でも判るように今年は例年より業界関係者数が大きく増えている。この全体の数字の73%は78カ国ものドイツ以外の国からの訪問者である。特に数ではイギリス、イタリア、フランス、スイス、オランダそしてオーストリアと続き、アジアや北米からも多くの業界関係者が集まった。確かに今年は例年に比べ、筆者の目にも日本人の業界関係者が多くなっていることがはっきりと見とれた。

初日に開催されたプレスカンファレンスに於いて、クルト・ヘッカー、ハイエンド協会会長から冒頭に『ミュンヘン・ハイエンドショーは、疑いもなく今や世界のオーディオ業界にとって欠くべからざるイベントとなっている』との声明があったが、まさにその通りであろう。

	2015年	2016年	2017年	前年比%
会場スペース	27,610m ²	28,610m ²	29,000m ²	+1%
出展社数	506	518	538	+4%
報道関係者数	504	516	541	+5%
業界関係来場者数	6,588	7,053	8,002	+16%
一般来場者数	14,079	12,436	13,410	+8%
来場者数計	22,667	19,489	21,412	+10%

(表1) 2017年ハイエンドショーの入場者のファクトシートと前年比

(注)来場者総計21,412人には出展者バッチを持つ2,978名の出展者と541名の報道関係者は含まれていない。残念ながら2015年の来場者数には及ばなかったが、昨年の落ち込みは十分にカバーしている

さて、今年のハイエンドショーの大きな特徴は、いよいよこのハイエンドの世界にもダウンロードやストリーミング音楽が確実に浸透してきたことである。事実、



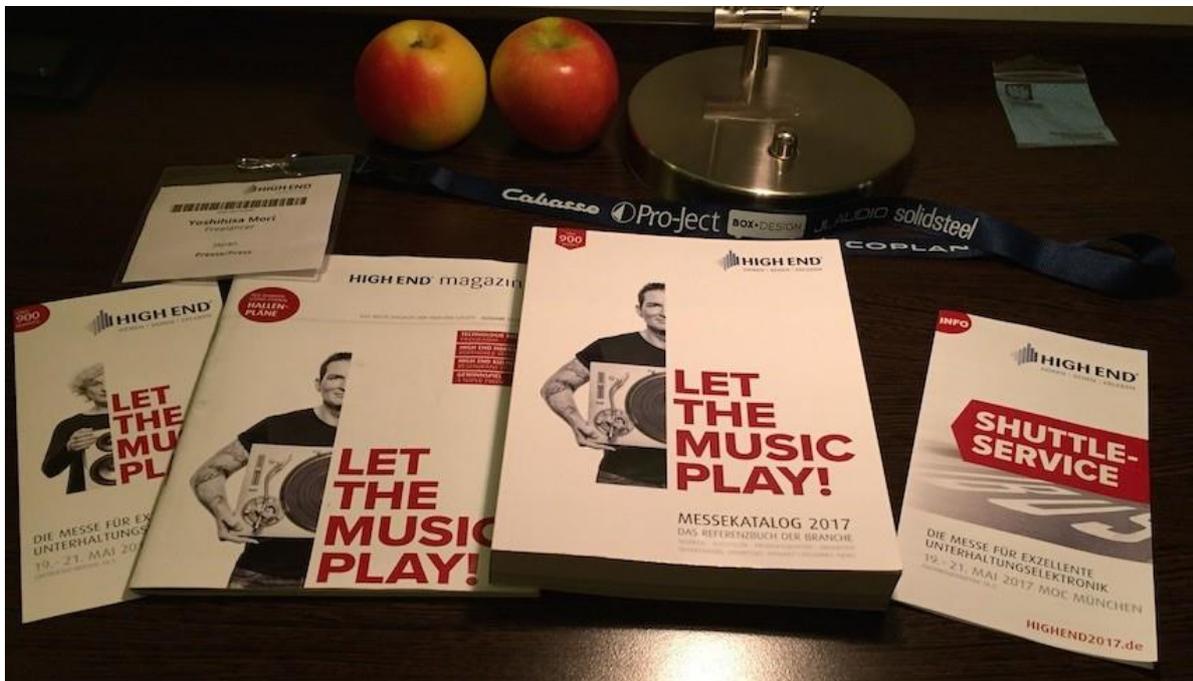
今回のプレスカンファレンスではゲスト・スピーカーにクリスチャン・ハートマン氏(ドイツ公共放送局ARD、ZDFの配信音楽システムプロジェクトリーダー)を招き、今後のダウンロード音楽やストリーミング音楽についての将来の展望と基礎技術の講演が行われた(写真3)。

(写真3) プレスカンファレンスの特別基調講演 “Next Generation Audio” の模様。講演はドイツ語で行われたが、英語の同時通訳も行われた

また、今年度よりこのハイエンド協会にドイツ・トーンマイスター連盟が新たに参加したことも大きな話題となっていた。これにより、今後さらにソフトとハードの交流深まりダウンロード音楽などの普及に弾みが付くことを大いに期待するものである。

ショーの初日はトレードデイとして、業界関係者のみしか入場が認められていない。しかも事前登録が必須条件となっている。ちなみに業界関係者の入場料は一人 20 ユーロ（約 2,500 円）とやや高額であるが、ショー期間中は毎日の入場が可能である。またプレス関係者は事前登録もしくは当日 ID や自身の媒体コピーなどを提示すると無料で入場バッジを発行してもらうことができる。一般入場者は初日を除き入場バッジを購入できるが、1 日券は 12 ユーロ（約 1,500 円）または 2 日券（金、土、日いずれかの 2 日間入場可能）20 ユーロとなっている。初日のトレードデイは業界関連者やプレス関係者が大勢詰めかけるため、どこのブースも緊張感が漂い力が入ったサウンドデモが楽しめる。しかも、一般公開日より空いているので、比較的ゆっくりとブースを回ることができる。

このショーの大きな魅力のひとつにカタログやパンフレットなどが完備していることである。詳細で出展者の名前やブランド名が全て網羅された有料のカタログは、ショーの案内書としてはもちろん、後日オーディオメーカーや代理店の検索用としてもとても役立つ。そして無料で配られるミニマガジンやパンフレットもとても見やすく、これだけ大規模なショーには必須のアイテムであろう（写真 4）。



（写真 4）ハイエンドショーで用意されたカタログやミニマガジン、分厚いカタログのみ有料（12 ユーロ）、他のミニマガジンやパンフレットは無料で配布。尚、右上は筆者の入場バッジ（プレス用）。全ての入場バッジがバーコードで厳しく管理されている

それでは今年のハイエンドショーについて筆者なりに気が付いたところを述べていきたいが、例年に引き続き今年もパナソニック株式会社の井谷 哲也氏、そして今年は新たに本誌編集委員また CS ポート株式会社の高松 重治氏にもハイエンドショーのレポートをお願いしたので、ここではなるべく別の視点からまとめてみた。読者の皆さまはそちらのレポートもお読みいただきこのショーの全体像とその魅力を感じ取っていただければ幸いである。

先にも述べたように、今年はダウンロード音楽を意識した DA コンバータの機器が目立ち始めていた。気になったのは、CD プレーヤーや SA-CD プレーヤーの製品が極端に少なくなり、ほとんどのブースのプログラムソースはアナログレコードが主役だったことだ。これは今年のハイエンドショーのテーマが“LET THE MUSIC PLAY!”でそのイメージ写真にアナログプレーヤーを持った男性の姿を描いたことと無縁ではないのだろう。世界的なアナログ回帰をここでも祝っているかのようにであった。

次に多かったのはダウンロード音源を PC や NAS での再生。そしてオープンリールテープのソフトも確実に増えていた。ハイエンドのアナログプレーヤーも多く出展されマニアの注目を浴びていたが、若い人々には比較的安価な Pro-Ject のアナログプレーヤーに関心が寄せられていた。このオーストリアのメーカーはカラーバリエーションも含め豊富なラインナップを揃えているが、今年は例のビートルズの「サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」50周年記念プレーヤーを発表していた。これはビートルズファンには堪らない贈り物かもしれない(写真5、写真6)。また、アナログレコードでは、オーディオ協会ではおなじみのジャズ歌手のリン・スタンリーさんが今年もハイエンドショーにやってきて、幾つかのブースで自身のニューアルバム「ムーンライト・セッション Vol 1」のLPそしてオープンリールテープのデモをしていた(写真7)。この件は高松氏のレポートに詳しく説明されているので、そちらも是非参照していただきたい。



(写真5) (写真6) Pro-Ject のビートルズ 50 周年記念アナログプレーヤー



(写真 7) ヨシノトレーディングのブースで新譜の LP アルバムを紹介するリン・スタンリーさん、詰めかけたファンで会場は満席

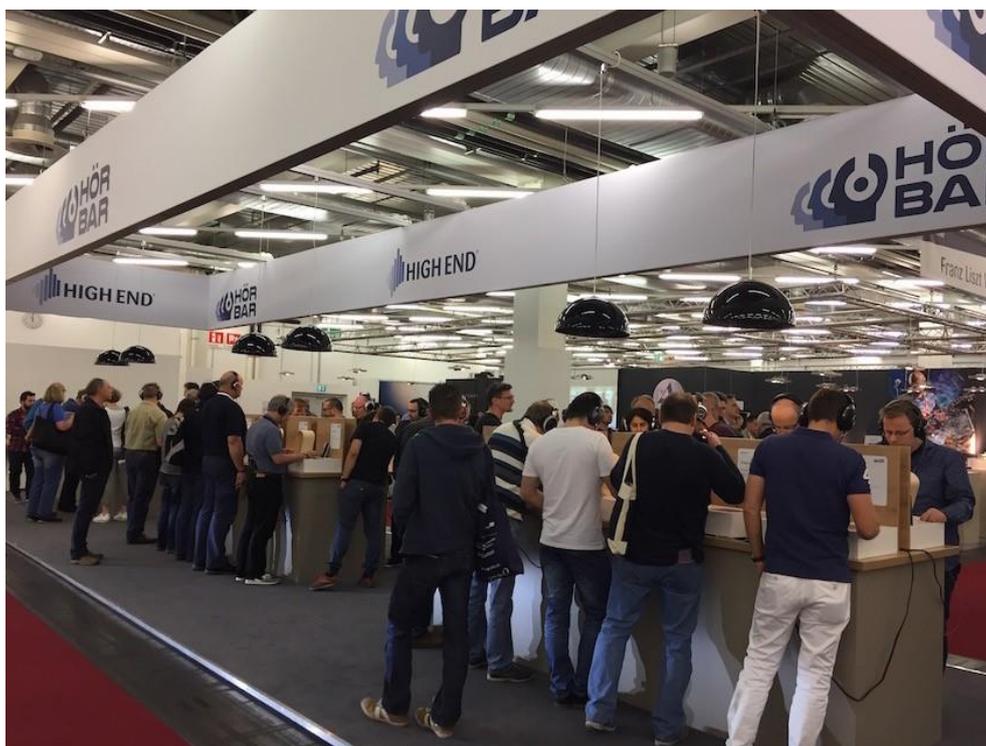
今年も真空管アンプは衰えを知らず、ここハイエンドショーでは多くの真空管メーカーが出展しその存在意義を主張していた。中でも前から気になっていたメーカーがドイツのガレージメーカーTHÖRESSだ。その外観がなんとも洒落ている。まるで昔のドイツ製プロ用機器のデザインなのだ。特にこのメーカーの真空管式フォノイコライザーは秀逸である。まさにドイツ人らしい精緻な作りなのである。設計思想や音は外観にも現れる。今回初めて設計者のトーレス氏と会う



ことができた。そこで聴いた音はまさに外観通りの音だった。プログラムソースは無論アナログレコード、その艶やかな音にしばし聴き惚れてしまった。たちまち、トーレス氏とその仲間たちと意気投合し記念撮影となった(写真 8)。こんな出合いがあるのもハイエンドショーの楽しみの一つなのである。

(写真 8) THÖRESS の創始者ラインハルト・トーレスさん(写真中央)とその仲間たち、それぞれ個性豊かな天才肌のエンジニアたち、自然オーディオ談義も加熱した

そして今年もヘッドホンメーカーの出展が目立った。ハイエンド協会としてもこのような事態に対応し、一昨年より各自のブースの他にヘッドホンバーなるコーナーを設けそこでは各社のヘッドホンが比較試聴出来るようにしたのである。ユーザーにとっては嬉しい配慮である。事実、このヘッドホンバーはいつも人だかりが絶えることが無かった。各ヘッドホンメーカーのブースでも新製品のヘッドホンには注目が集まり、改めてハイエンドの世界にも確実にヘッドホンが浸透してきていることを実感した（写真9、写真10）。



（写真9）各社ヘッドホンが聴き比べられるヘッドホンバー、なかなかの人気コーナー



（写真10）日本のファイナルも新製品平面磁界型ヘッドホンを発表、ブースは連日賑わいをみせていた

そして最後にご紹介するのがSA-CD立ち上げ時代にDSD録音機や編集機器を開発設計したエンジニア達が独立して設立したSONOMAだ。現在ここでは優れたDAコンバータそしてヘッドホンを手がけている。こうして昔仲間が活躍している姿に出会えるのもハイエンドショーならではの。また、このショーでは多くのオーディオ仲間に再会でき、年に一度の交流を深める絶好のチャンスでもあり、ショー自体もさることながらこうしたことがこのハイエンドショーの大きな魅力なのだ(写真11、写真12)。



(写真11) DSDならお任せあれ、Sonoma Acousticsのメンバー。左からデヴィッド・ワレストラさん、デヴィッド・川上さん、CEO アンドレアス・コッホさんのお歴々。今年は静電型ヘッドホンも発表した



(写真12) 一年に一度の楽しいミーティング、左から Vivid Audio の技術責任者ジェイク・パーチェスさん、筆者を挟んで Hi-Fi Pig のリネットタさんにご主人のスチュワート・スミスさん

このように楽しいショーを演出してくれたハイエンド協会のメンバー、そしてそれを支える多くの団体やボランティアの方々に敬意を表し、このショーを陰で盛り立ててくれたサービスチームの写真をここに掲げ謝意を表したい。「皆さま、今年も素晴らしいショー、本当にありがとうございました」。Ich danke Ihnen Alles. (写真 13)。



(写真 13) 縁の下の力持ち、このショーの成功を支えたサービスチームメンバー。彼らの笑顔が今年もこのショーが成功裏に終わったことを物語っている